

人間文化研究所主催・後援 公開シンポジウム等の報告

● 外国人の住みやすいまち(ナゴヤ)をめざして —「名古屋市外国人生活実態調査」報告—

平成 19 年 7 月 28 日(土)、本学山の畑キャンパスにおいて、「外国人の住みやすいまち(ナゴヤ)をめざして」と題して人間文化研究所主催の公開シンポジウムが開催されました。シンポジウムでは、まず、平成 18 年度 9 月～10 月に実施された名古屋市市長室国際交流課からの委託研究「名古屋市の外国人生活実態調査」(名古屋市在住の外国人 3000 名を対象とした 7ヶ国語によるアンケート調査とインタビュー調査 代表者:村井忠政)の分析結果が報告され、続いて「外国人の住みやすいまち」を目指すための全体討議や参加者との活発な質疑応答が行われました。

シンポジウムには外国人問題に関心のある NPO 活動家、研究者、行政担当者、一般市民、学生など約 50 名の参加があり、皆熱心に議論に聴き入っていました。

福吉勝男(人間文化研究科教授)

● 国境のないまち—ハンガリーの人と文化

2007 年 1 月名古屋
市立大学がハンガリー
のペーチ大学と大学間
交流協定を締結したこ
とを受けて、11 月 17
日に市民セミナー「国境の



のないまち—ハンガリーの人と文化」が開催された。本セミナーは、「ハンガリーの文化的多元性」研究会が主催し、ハンガリー文化センターと愛知県ハンガリー友好協会、そして、本学の人間文化研究所の後援を受けて行われた。

日本におけるハンガリーの各研究分野の気鋭の専門家が集まった本セミナーでは、筆者を含めて四つの講演が行われ、最後に報告をまとめる二つのコメントが述べられた。ハンガリーという日本ではやや馴染みが薄い東欧の一国に関するセミナーにも関わらず、東海地区で初めての試みに、予想を上回る 33 名の参加者を迎えることができた。

山本明代(同研究科准教授)

● 「青少年の自立支援」 2007 年 12 月 1 日

努力すれば必ず報われた「努力保証社会」から、生来的に希望を持てる人と絶望する人に分けられる「希望格差社会」へ…基調講演にて山田昌弘氏は、学卒後の職の保証の消失、非正規雇用の増大を挙げ、将来性や安定性での青

少年の格差拡大を説明した。また、今のフリーター対策が、フリーター問題を「あってはならない」ものとしていることを批判し、「ある」事実に基づく対策の必要性を説いた。

「青少年の自立」調査報告、NPO2団体の活動報告後のパネルディスカッションでは、社会システムと現場支援の関係が議論された。社会の多様化に合わせた支援の多様化や、現場と行政の橋渡しとしての「メゾ」の必要性といった、社会システム分析と現場支援との相互連携を求める意見が出た。一方で社会システムは変更不可として、青少年を変える必要を訴える意見も見られた。

よりよい実践に繋げるためにも、「べき」論を脱した視点を求められることを感じる。

小林信司(同研究科 博士前期課程)

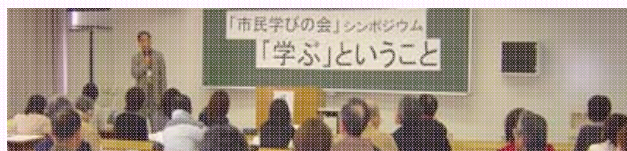
● 「市民学びの会」発足と今後に向けて

2007 年 9 月に設立総会を行い、「市民学びの会」が本格的に活動を始めた。11 月 18 日には市大祭に合わせてシンポジウム「『学ぶ』ということ」を開催し、成玖美先生の生涯教育についてのご講演とともにパネラーとなった本研究科社会人大学院生を中心に学びの経験とその意義・思いを交換する貴重な機会をもつことができた。

開催にあたって市民学びの会の活動が新聞で報道されたことにより、男女を問わず、幅広い世代の市民から多くの反響があった。講義形式の受身の学習では飽き足らないという意見や学びの友や知的交流を求める声が多く寄せられたことによって、大学において市民の学びの場を創ること、大学を市民に開くことの意義を会員と改めて考えている。

今年 2 月に担当者として発足の準備を始めた「市民学びの会」は、多くの方々の協力を得て、今や自律的な組織として動き出している。会員も徐々に増え、11 月から哲学・自分史・英字新聞・子育ての各サークル活動も開始した。人間文化研究所や本研究科教員が主催する各種講演会・シンポジウムにも多くの会員が参加するようになり、すでに双方向の関係を形成する基盤も創られ始めている。今後ますます会が発展し研究科との連携・協力関係が進むことを心より願っている。

山本明代(同研究科准教授)



● マンデーサロン

教員間、教員と学生間の研究交流を目的とした月例懇談会(市民にも開放)です。

第10回 10月15日

テーマ: <ドイツ国制の近代的改革とヘーゲル>、
そしてベルリンの今

講師: 福吉勝男(同研究科教授)

今回のベルリン訪問は氏にとって1994年の国際学会に参加以来の13年ぶりであったとのこと。東西ドイツの融合が進む中で、ベルリンの壁のみならず、生活の上でも制度の上でも壁が撤去され、融和が進んでいる状況が語られた。そのお陰で、今回の訪問の目的であったヘーゲル研究のための資料収集がとてもスムーズに行えたと言う。

さて、今回の資料収集は「ヘーゲル国家論の謎」の解明のためだった。ヘーゲルの国家論は『法哲学講義要綱』に書かれているが、そこには謎が存在するのである。市民が市民の自覚をもって社会を形成し、その市民が市民社会を豊かに発展させるために国家を展望する姿と、それにふさわしい国家のあり方(機構・制度)を述べると言いながら、その国家論には不可解な点があって、市民の自治的・自主的活動の姿を「市民社会」論において最高に示しながら、「国政」論ではそれにふさわしいものとはせず、むしろこれに先立つ彼の国家理解から後退しているのである。この謎である。

この謎はどうして生じたのだろうか。現代のところは、政治反動を目の当たりにしてヘーゲルが自己規制をしたと推定されている。しかしこの推定は正しいのだろうか。今回のドイツ訪問は、ヘーゲルがベルリン大学の総長としてプロイセン改革に協力した相手の宰相のシュタインやハルテンベルクの国家改革構想の見解との対比で、この謎に迫ってみようということになされたわけである。

シュタインのものでは、1807年9月の「ナッサウ覚書」、1807年10月の「10月勅令」、1808年11月の「都市条例」を、ハルデンベルクのものでは、1807年9月の「リガ覚書」を入手することが出来たと言う。久田健吉(同研究科研究員)

第11回 11月12日

テーマ: 「日本の社会参加仏教」

講師: ランジャン・ムコパディヤーヤ(同研究科准教授)

まずはランジャン先生のエネルギーにあふれた熱のこもったお話ありがとうございました。また先生力作の書『日本に置ける社会参加仏教—法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理—』に贈られた二つの賞の受賞おめでとうございます。そして毎々マンデーサロン運営にあたられる諸先生、スタッフの皆さんご苦労様です。マンデーサロンは私にとりましては、浅学を少しでも補うべく、絶好の機会と思ひ積極的に参加させて頂いております。当日のサロンの内容である「社会参加仏教」についてであります。今私の研究テーマであります18世紀ヨーロッパの寛容思想とも少々関連ある

テーマであり、興味深く聞かせていただきました。当日別所先生からも質問がありましたが、国家の義務としての福祉政策と宗教団体の慈善活動との関係をどのように理解していくのか？ また教義の実践なのか？単なる道徳的意味合いから来る社会的弱者救済活動なのか？宣教活動が本当に裏側にはないのか？ などまだすっきり理解できないところもあります。近代民主主義国家において、普遍的思想に位置付けられる「政教分離」思想、またフランス国家の「(宗教・教(育)分離)政策などと考え合わせ、宗教団体の持つ社会的パワーが無視できない強さがある限り今後深く検討しなければならないテーマと感じました。

服部篤睦(同研究科博士前期課程)

● Human & Social サイエンス・カフェ

丸善と連携して今年度からはじめた新企画、月1回・日曜の開催(カフェ・グラシュー)で開催。

第2回 7月22日(日)

テーマ: 「大人になってどういふこと？」
—大学生への調査結果から問題に迫る—

講師: 後藤宗理(同研究科教授)

高校二年、まさに揺れ動く思春期の娘と一緒に参加しました。人が生まれ、乳・幼児期、学童期～を経て老年期に至る大きな流れの中で、それぞれの段階において何を獲得し得るのか、またはできないのかという、エリクソンの話は年ばかりかさんでしまって中身が伴わず、なかなか大人になりきれない私には大変興味深いものでした。せめて、私の人生も、まあよかったんじゃないの！と思えるように、これからの時を過ごしていきたいと思ひ感じました。

卒業してから二十余年がたち、久しぶりに聴く後藤先生の話は眠りかけていた何かをチクチクと刺激し、日常の様々な悩みを温かく包み込んで下さいました。現代の大学生の実態を伺って、私も決して良い学生ではなかったなあと。ただ二十年以上がたち、同じ先生の話がこんなにも心の深い所に響いてきて胸にストンと落ちたり、共感できるようになったのは、ただ何となく過ぎてきたと思っていた年月の中で私が出会った人々や、経験してきた事などが少なからず影響しているのではないのでしょうか？ 古田みぎわ(参加者)

今回の講演では、大学生の話を中心としたものだったので、今の私にはまだ共感できない部分があったものの、現在の大学生の実態を知ることでもでき、これから進路を決めていく上でとても参考となるお話でした。

古田祐理乃(参加者)

第3回 8月19日(日)

テーマ: 「沖縄の祭りと芸能」

講師: 阪井芳貴(同研究科教授)

日本各地で記録的な猛暑がTVニュースを賑わす8月19日に開催された阪井先生による「沖縄の祭りと芸能」も気温に負けない位の熱気を帯びていました。参加者の年代も南沙織の年代から安室奈美恵の年代と幅広く、当然、参加者

の沖縄への関心事もさまざまで、最後の質疑応答を拝聴すると歴史、文化、親族形態、戦争問題などな多岐にわたっていたようでした。それをまとめる先生はさぞかしご苦労されたことでしょう。

沖縄の生活の基本となる家族や村落の中心に神があり、祖先があるということは観光地化された現在でも一歩踏み込んで沖縄を観察するとみえてきます。神と人の距離感の近さを裏付ける事例に沖縄における芸能の位置付けがあると思います。本来の芸能は神に対しての奉納であり、観客の存在は重要ではありません。沖縄は神と芸能と民衆が一体化しており、極端なことを言えば、祭事には村人全てが芸能者となり「カチャーシ」をしながら参加します。沖縄の人にとって祭事はきわめて身近かで、神と人、もしくは祖先と子孫のコミュニケーションであるといえるのではないのでしょうか。美ら島沖縄大使でもある阪井先生が「神の島・沖縄」への旅の楽しみ方の提案でもあり、商業主義的な祭りが増加する現在において「祭り」の原点を見つめ直す意味も含めて有意義でした。

唐木健仁(愛知県立大学大学院修士課程)

第4回 9月16日(日)

テーマ:「ポテンコ?の言語学

—ソシユール生誕150年よせて—

講師:成田徹男教授(人間文化研究科教授)

「ポテンコ」という語形から判断して、「外国からきたことば」と感じる日本語話者が多いのでは?という先生の問いかけに、うなずく参加者が多かったです。私たちは、語の形から語種(和語、漢語、外来語)を推定するようなことがあります。実は、「ポテンコ」は、成田先生がことばの本質について語る時、よく例に出される先生の造語なのです。「ワンワンほえる動物」のことを「イヌ」と呼んでいます。それでは、「ワンワンほえる動物」を「ポテンコ」と呼んではいけなんでしょうかと、先生はさらに問いかけます。たとえば、私一人が、「ワンワンほえる動物」のことを「ポテンコ」と言っても、ワンワンほえる動物の「イヌ」とは、他人は絶対に思いません。しかし、ある集団で申し合わせれば、「ワンワンほえる動物」を「ポテンコ」と言っても通じるようになります。伝達しあう人同士のあいだでわかればよいからです。このように、ソシユールのいう「恣意性」に関して、成田先生は少しずつ、その謎を解いていきます。恣意性があるからこそ、言語は地域や時代によって変化するということも教えていただきました。しかし、現実には社会性をも併せ持っているのです。勝手に変えることはできないことを、先生は例示され丁寧に説明されました。

山田陽子(同研究科博士後期課程)

第5回 10月21日(日)

テーマ:「詩人BENNの”詩と真実”

—1933年のナチ加担について—

講師:森田 明(人間文化研究科教授)

詩人ベンへの熱い思いを込めたお話が進むに連れて、まさにドイツ語で言うゲミュートリツヒカイト(Gemütlich Keit)(くつろぎ・安らぎ)の雰囲気漂う。文学・音楽・美術でも芸術家

の作品は、その人の気質・性格、あるいは生い立ち・環境の影響を大きく受ける。エピソードを多く交えながら、詩人ベンの各作品とその背景が語られる。詩そのものよりも、まずこの詩人への関心が高まり、あとで具体的に彼の詩を読んでみようという気持ちにさせられる。ハイネ・ミラー・リルケらの抒情的詩人とは全く異なり表現主義的詩人と言われるベンについて、これは難解な話になるのでは、とはじめは予想していた。しかし、彼の作品に直接接したいという意欲がわき起こるのは、この催しに参加した意義を痛切に感じる。2時間でもまだ足りない。もっと参加者の質問・対話・議論の時間があるとさらに楽しいものになっただろう。

この催しも「市民学びの会」のどんな催しも、先生たちの研究内容を聴くだけでなく、自由な討議や交流がなされることも重要であろう。いずれにしても社会に開かれた大学として名古屋市立大学の益々の発展を願ってやみません。

寺岡信之(参加者)

第6回 11月16日(日)

テーマ:「血液型性格論のホントのトコロ」

講師:久保田健市(人間文化研究科准教授)

血液型性格論というところでは、自分自身仕事の関係と一緒にあった人としゃべっていて血液型の話になると、漠然とこうかなと思うとあたるが多々あるため、実際のところの何か因果関係があるのではないかと考えるようになりました。ただ、なぜその血液型はそうなのか、具体的に考えていくと生物学的なところに入っていく、血液と脳のそれぞれの機能と関連など、知らないことが多すぎて想像することもできません。そうしたときに、そもそも血液型ABOの分類自体について、血液の種類は4つの種類があると思っていたけれど、そう考えるのではなく「Aか、Bか、AとB両方あるのか、AとBどちらともないのか」と、すべての血液は、2種類の4分類と考えるんじゃないかと。そう考えたときに、すべての血液を2種類の4分類したものに対して、性格も同じように、すべての性格を2種類の4分類したうえで、血液型と性格との相関関係を考えなくてはいけないとすると、ではその性格の定義はなにか?というところが大事なのではないかと。そして性格をどう計るのかという問題も考えられます。結局本人としては自分の性格をこう思っているけれど、周りから見たら「あなたこうでしょう」というところは十分考えられ、その周りの人の意識についてもその人がどうゆう性格意識をもって何と比較してその本人に「あなたはこうでしょう」と思ったか、までを含めて考えないと性格をうまく計ることが難しいといえるのではないかと。

ただそうまでして血液型と性格をつなげて、意味があるのかと考えると、結局ふだんの会話のネタ程度ぐらいしか意味がないかと思うと探究心も萎えてしまいます。逆に今回の話であったように、それによる差別や偏見などにつながるなら、そのままブラックボックスのまま「当たるときもあれば、はずれるときもある」でいいのかなと思いました。

服部 正(参加者)

リレーエッセイ 人間・地域・共生

健康教育に日・韓の知恵を出し合う 穂丸武臣(人間文化研究科教授)

冬が訪れると、岐阜の M 先生から富有柿が送られてくる。甘くて味には品格がある。思い出すのは柿にも似た故平田欽逸先生のお顔である。先生は美濃市で内科医を開業する傍ら、日本教育医学会創始者であった。

日・韓健康教育シンポジウムは、1982 年の日本教育医学会(名古屋大会)に参加された韓国学校体育学会の韓 裕澤会長と平田会長の間で学術交流が締結されてから始まり、それから 2 年ごとに韓国と日本で交互に学会を開催するようになった。第12回大会は、故平田会長の御遺志を継いで 25 年ぶりに名古屋市(名市大)で開かれたのである。

大会の主テーマは、子どもの「こころ」と「からだ」の健康問題であった。基調講演で、小田 豊氏(国立特別支援教育総合研究所理事長)は、日本の子どもの「こころ」と「からだ」の現状について、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩を「雨ニモアテズ」、「風ニモアテズ」・・・とパロディ風に語り、子どもの「こころ」と「からだ」の、ひ弱な状況と問題を指摘した。このような問題の責任は、子どもでなくそれを生み出した大人にある。また、「生きる力」「ゆとり教育」については、的確な評価検証がされないままに、教育政策の転換が進行している。さらに、学校選択制や極端なクラスの少人数制が、地域の連帯感を消失させ、クラス内のダイナミックな教育活動を阻害すると、その問題点を示した。最後に、子どものためになる教育政策を策定するには、国民の教育に対する監視が不可欠であると締めくくられた。さすがに、文部科学省で長く教育政策づくりに関わってこられた小田氏の話には説得力があった。

韓国代表の金大中(慶熙大)先生は、韓国では子どもの体力低下が進行しているにもかかわらず、中学・高校の体育の授業時数が週 3 時間から 2 時間に減少し、受験戦争、知育偏重傾向に拍車をかけている。また、政府はオリンピックやワールドカップなど、一部のエリートスポーツ選手養成に力を注いでいるが、本当にスポーツや身体活動が必要な子どものための施設や環境対策が遅れていることを指摘した。

日・韓の社会状況は、少子・高齢社会の真ただ中にあり、子どもと高齢者の健康問題にも多くの共通点が見出された。

問題解決のために、両国の研究者が智恵を出しあっていく学術交流の重要性を再認識した。

● 外部研究資金の獲得

財団法人 放送文化基金 平成 18 年度助成・義援金

「人文社会・文化部門」(交付は 19 年度)放送法制研究会

「放送法における自由と制度

—文化形成のための法プロジェクト—

井上 禎男 (名古屋市立大学人間文化研究科准教授)他

● おわびと訂正

前号の研究所プロジェクトの紹介に一部誤りがありました。

お詫びし、あらためて正しい紹介を下に掲げます。

□ テーマ:越境する文学の総合的研究

研究代表者:土屋勝彦(人間文化研究科 教授)

研究分担者:田中敬子(同教授)、谷口幸代(同准教授)、山本明代(同准教授)、沼野充義(東京大学大学院人文社会系研究科 教授)

研究概要:英語圏、独仏語圏、ロシア・東欧語圏、日本語圏における過去および現在の越境作家たちの歴史的文化的な役割とその方向性を考察し、その文化的営為の諸相と意義を明らかにすることを目的とする。今年度は、最終年度により、各研究分担者同士による研究会を開いて、それぞれ論文をまとめていく。また各種研究会、シンポジウムへの参加、あるいは講演会、朗読会などを適宜行い、資料収集・整理も続行する。そして年度末に研究報告書をまとめ、出版助成金獲得に向けて努力する。

(科学研究費補助金基盤研究(B)採択)

● Ranjana MUKHOPADHYAYA

(ランジャナ ムコバディヤーヤ)准教授

「日本仏教社会福祉学会」の第 1 回奨励賞の受賞に続き、

「日本宗教学会」賞を受賞されました。

● <Human & Social サイエンス・カフェ>今後の予定一覧

・1月27日 佐野直子准教授

「途上の言語—イタリア・ピエモンテ地方のオック語への旅」

・2月17日 山田美香准教授「少年犯罪」

・3月2日 平田雅巳准教授

「ブッシュ外交の総括

—「対テロ戦争」の8年」



編集後記: 明日は冬至、という暮れもおしつまった段階で、この後記を書いています。少しく発行が遅くなってしまいました。今回も字が多い・・・ですが、それだけ書きたいことが多い、情報量も多い、すなわち研究所の活動も順調、ということだと思っています。来年もよろしくお願いたします。(さ)